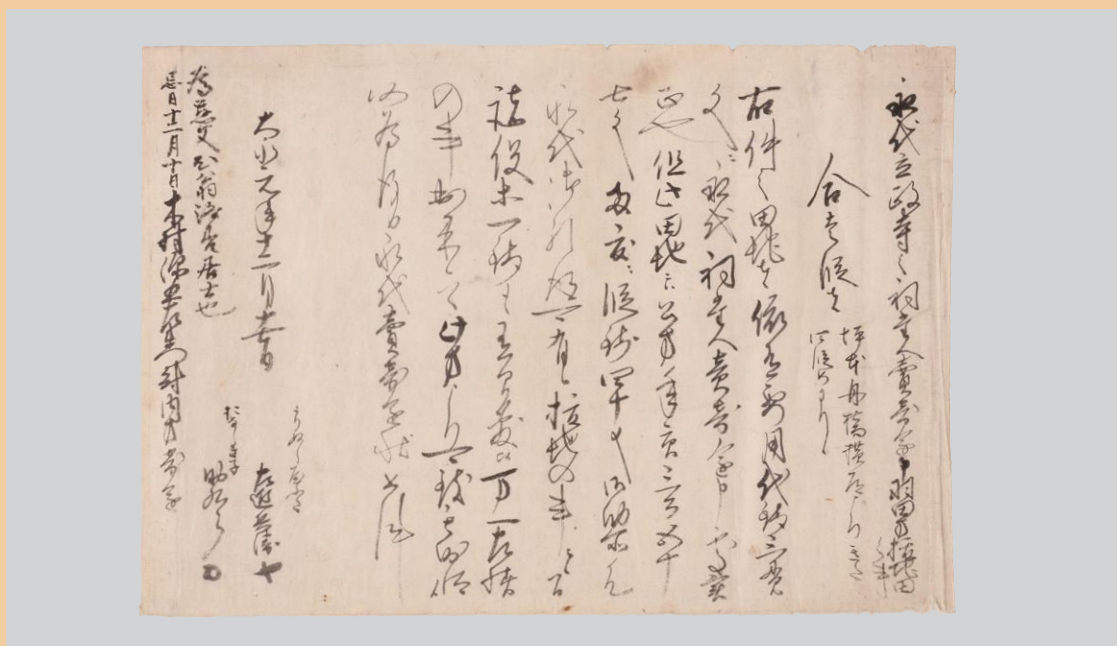




左近兵衛田地売寄進状

大永元年（1521）12月17日 立政寺蔵

同一物件について売却と寄進を同一年月日付で行うことを売寄進^{うりきしん}といいます。売寄進の目的は徳政による売買契約破棄の回避などが考えられ、売寄進は中世にみられる社会的慣行の一つといえます。多くはそれぞれ売券と寄進状が作成されますが、本状は、それらが一つにまとめられた珍しい事例です。寄進者の木村源五左衛門尉さんの内方（身内の人）、そして、売主の藪田（現岐阜市藪田）の左近兵衛さんまでも、各々が立政寺へ^{やぶた}帰依（信仰心を抱いてすがること）していたと考えられています。

企画展

美濃の名刹 立政寺の寺宝 —古文書と仏画の世界—

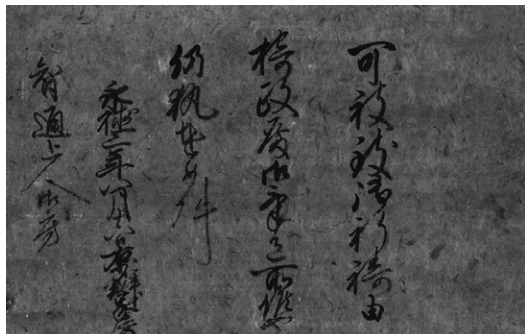
2022.9.17(土)～10.30(日)

岐阜市歴史博物館では、令和2年より岐阜市西^{にし} 庄^{しょう}に所在する立政寺様のご什宝について調査を行ってきました。調査は継続中ですが、企画展を通じて、その成果の一部をご覧いただきたいと思います。いくつかの出陳作品を通じて、展覧会の概要を見どころとともに紹介します。

智通上人と立政寺

立政寺は、智通上人（1314～1403年）によって開かれた浄土宗寺院で、草創については、寛正5年（1464）成立の「立政寺縁起」には次の趣旨が記されています。

智通が関東から西庄を訪れ、文和2年（1353）に「根本庵」と名付けた一庵を営んだ。関白・二条良基の執奏により後光厳天皇（北朝）の尊顔を拝することになり、「北朝御勝利」と「政務成立」の祈祷を命じられ、その効験によって北朝が勝利し、「立政」の寺号を賜った。以後、二条良基をはじめ、源（石川）義熙^{よしひろ}や藤原（小野）種一^{たねはつ}ら近隣の武士の帰依により、寺領と堂宇がととのえられていった。

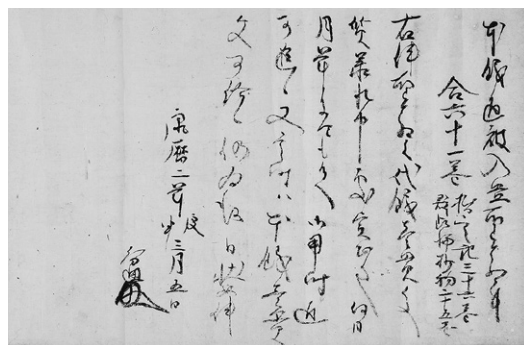


二条良基御教書
永徳二年（一三八二）八月十六日

浄土宗は法然（1133～1212年）にはじまる宗派で、法然の高弟の証空の流派を西山義（西山派）といいます。さらに西山義は証空の四人の弟子が西山四流を開きました。智通は、浄音

（1201～1271年）にはじまる西谷流の法系に連なります。智通は石見国の出身で、関東で智円律師に師事したのち、美濃へ移りました。立政寺を開いたのは、文和2年を遡ると考えられています。西庄周辺の武士の支持を得て、寺観をととのえ、末寺を増やしていきますが、決して平坦ではありませんでした。「智通置文」や「智通掟書」からは、立政寺と末寺との関係に苦慮している様子がうかがわれます。智通は聖教（經典や高僧の説いた教えを記述する典籍）の修学や相承を通じて、本末関係、あるいは師弟関係を規定しようとしていました。

下図は智通が聖教を質草に銭一貫文を借り入れたときの証文です。最も大事にしていたものを質に入れないといけないほど、寺院経営も安泰ではなかったのです。



智通聖教質券
康暦二年（一三八〇）三月五日

莊園と領主

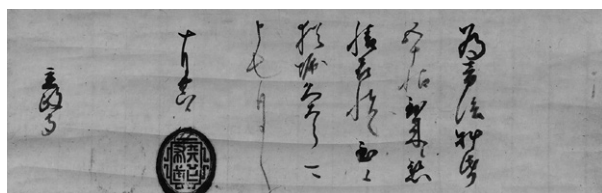
表紙にあげた売寄進状には、売寄進した土地の場所や広さ、その対価だけではなく、土地にかかる税のことが事細かに記されています。先の質券にも、質草と借入金額の他に、質草の取り扱いが記されています。返済期限や利子は記されていませんが、それらが無いということは無期限・無利子で契約していたとみられます。

古文書というと、厳めしく思いますが、本展では生々しい文書が多くみられます。それらの中心は、立政寺へ莊園を寄進したことを証明するもので、表紙の売寄進状は、その一つです。

莊園には、その税をめぐる幾重にも収取関係が存在しており、中世社会は莊園をめぐる微

妙なバランスで成り立っていました。立政寺には、中世後期（14～16世紀）の古文書が多く伝来し、西荘や隣接する市橋荘に関する情報が豊富です。美濃国全体をみても、まとまって伝世する荘園の史料は希少で、美濃国における荘園の様相を伝える貴重な文書群といえます。

下図は立政寺からの贈物に対する織田信長からのお礼状です。それまでの「立政寺文書」にはみられなかったタイプの古文書で、錯綜した権利関係が、大きな地域権力によって整序されてきた時代相をうかがわせます。

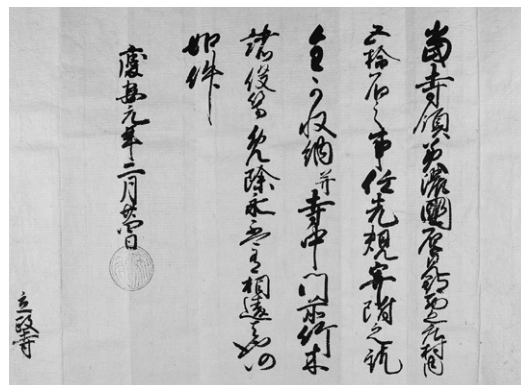


織田信長黒印状 室町時代 16世紀

朱印地と檀越

それがやがて、徳川将軍と立政寺という単線的な関係へと収斂していきました。右段上部の図は、三代将軍徳川家光による朱印状で、立政寺の寺領50石を安堵しています。立政寺には幕末の十四代将軍徳川家茂までの十通の朱印状が伝わっています（六代・七代は無）。

一方で、新たな檀越の広がりもうまれました。研究ノートで紹介している淀稲葉家もその一つです。身分や階層が定まると、家の系譜をととのえる動きがみられるようになり、由緒ある寺院との関係が見直されるようになったのです。町人や百姓も同じで、自家の系図を立政寺に奉納した例がみられます。



徳川家光朱印状
慶安元年（一六四八）二月二十四日

浄土への祈り

浄土宗は、念仏を唱えることで極楽浄土へ往生することを説きます。法然は善導の著した『^{かん むりょうじゆきやうしよ}観無量寿経疏』（『観無量寿経』の注釈書）によって、そのことを確信しました。そして、証空は『観無量寿経疏』の世界観があらわされている絵像として「^{たい ままん だら}当麻曼荼羅」（国宝、當麻寺蔵）に出会ったのです。証空は当麻曼荼羅の普及に尽力したといえます。

立政寺は下図の「当麻曼荼羅」を本尊とする堂宇を中心に発展してきたと考えられます。

同曼荼羅は檀越の寄進によるもので、その檀越は門弟となり、自らの草庵をも末寺として寄進しています。立政寺には草創から江戸時代までの仏画が蓄積されています。それらの多くは、浄土への願いを込めて、周辺の武士、あるいは民衆から寄進されたものとみられます。



岐阜県指定文化財 当麻曼荼羅（部分） 観応元年（1350）

栄三・東一 岐阜を描く

2022.9.13(火)~12.18(日)

岐阜市美殿町出身の日本画家、加藤栄三・東一は漆器商を営む商家に生まれました。

父、梅太郎は大阪の店を長男に、岐阜の店を栄三に継がせる予定をしていましたが、栄三が東京美術学校へ進学したことで東一にそのお鉢が廻り、岐阜中学を卒業したばかりの東一は岐阜で家業を手伝うことになります。

しかし、商いが肌に合わなかった東一は、己の生涯を深く考えるようになり、昭和15年(1940)12月、父の反対を押し切り千葉縣市川市に住む兄、栄三を頼って上京し、昭和16年(1941)、東京美術学校へ進学します。

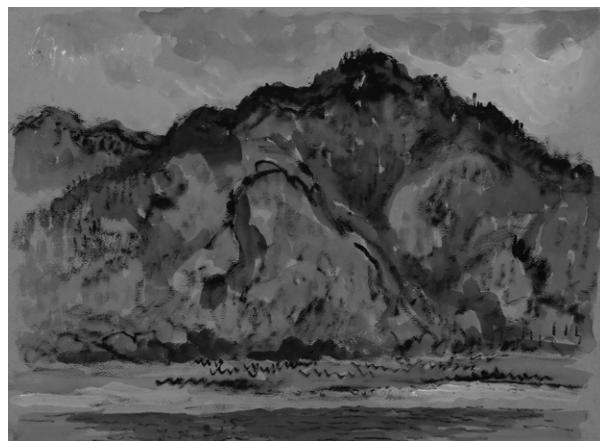
戦時を挟んでの美術学校生活を終えた東一は栄三が所属していた日展へ出品を始めます。東一が日展に初入選した昭和22年(1947)、栄三は揖斐川を取材した「溪音」を第3回日展に発表した後、自由な体制での作品発表の場を求め、山本丘人、上村松皇とともに創造美術の立ち上げに参加します。翌年、栄三は日展から、創造美術へ活躍の舞台を移し、岐阜長良川畔から舟伏山を取材した「月響」を創造美術展第1回展



加藤栄三「溪音」スケッチ

に発表します。

栄三が日展を脱退したことに困惑したこともあったのか、昭和23年(1948)、戦後の混乱した東京での生活に疲れた東一は、いったん岐阜へ帰り、ふるさとの山を見つめ心を癒していたようです。幼児期に遊んだ金華山を懐かしく思い、疲労した精神を癒すように描いた金華山を題材にした作品は第4回日展に「山」という題名で発表されます。



加藤東一「金華山」スケッチ

東一は、ある対談で「ふるさとの山や川、私にとっての金華山と長良川、これは私のバック・ボーンと言えるかも知れません。私の心の支えになっていることは事実ですね。」「山というのは、心のなかの、ある意味で信仰に近い対象ですね。日本で代表的な山は富士山でしょうが、私にとって金華山は神みたいな存在といえる。やはり、長良川は私の母なる川であり、金華山は私の父なる山と言える。」と語っています。

本展では、収蔵作品の中から栄三が創造美術展に発表した「月響」の大下絵とスケッチ、東一が描いた金華山のスケッチと本画(完成作品)を併せて紹介します。

栄三・東一は幼少期を過ごした「岐阜」を愛し、たびたび帰郷しては金華山と長良川を描いています。本展で紹介する二人の作品から故郷岐阜をこよなく愛した望郷の念を読み取っていただければ幸いです。

加藤栄三・東一記念美術館

NIHONGA 栄の会

2022.9.13(火)～10.30(日)

中部の芸術文化の担い手となるべく芸術家の育成と新しい芸術の開拓、伝統技術の伝承のため昭和41年（1966）、愛知県立芸術大学は開学しました。中でも日本画専攻は芸術の基本である個性の発露とは別に、技術や素材を見直す基礎教育の重要な柱として模写教育を学習方法に取り入れて行きます。

開学からほどなく、教育参考資料としての目的で始められた愛知県立芸術大学法隆寺金堂壁画再現模写事業には前田青邨の双壁と謳われたもりやただし守屋多々志、つきおかえいき月岡榮貴はじめ、多くの画家たちが総力を挙げてこの計画に参加します。

今回、法隆寺金堂壁画 5 号壁半跏思惟菩薩像、9 号壁弥勒浄土図、11号壁普賢菩薩像の再現模

写において陣頭指揮を執った日本美術院同人、月岡榮貴と月岡班として再現模写事業に参加した5名の日本画家を紹介します。

月岡榮貴は大正5年（1916）、東京に生まれ、昭和17年（1942）東京芸術大学日本画科を卒業後、前田青邨に師事し院展を中心に活躍します。制作の傍ら高松塚古墳壁画などの模写事業に参加し、昭和51年（1976）紺綬褒章を受章。愛知県立芸術大学で教鞭を取り、多くの日本画家を育てました。

また、月岡とともに出品する5名の日本画家はいずれも月岡に指導を受けた愛知県立芸術大学の卒業生で、各作家50号から130号までの大作を展示します。

月岡榮貴という日本画家の魅力と、その教えを留め置く5名の日本画家の作品を通して、技術や素材から読み解く日本画の魅力を再確認してください。

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4、5ページで紹介した以外の分館展覧会は以下のとおりです。

・第1展示室

12月20日（火）～

収蔵作品展

・第2展示室

11月1日（火）～12月18日（日）

二人の洋画家 黒田勝・皇 展

12月20日（火）～令和5年1月15日（日） 河井一郎 洋画展 ―紆余曲折70年―

■本館特集展示（2階 総合展示内）■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2か月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

～10月30日（日） 岐阜の仏教絵画

11月5日（土）～12月27日（火） 岐阜の須恵器

■分室 原三溪記念室の展示■

～11月6日（日） 濃尾震災と復興支援

11月8日（火）～12月18日（日） 三溪の師・山田省三郎

上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

研究ノート

立政寺と淀稲葉家(後編)

中島 雄彦

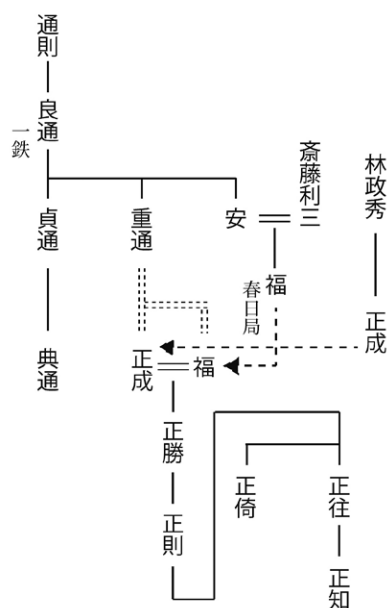
3 淀稲葉家

前号では、立政寺(岐阜市西荘)に伝わる狩野守政筆「双龍図」とそれを寄進した稲葉正則(1623～1696)について紹介した。

寛永11年(1634)の稲葉正則の家督の継承には、特に三代将軍徳川家光(1604～1651)からの下命があったようである。また、家光は同年6月22日、上洛の途次に、12歳の正則を見舞うかのように、正則のいる小田原城へ御成を行っている。正則が家光から特に目を掛けられていたことは間違いなく、その淵源は彼の系譜にある。正則の祖父にあたる正成(1571～1628)の室は、徳川家光の乳母として知られる春日局(福、1579?～1643)であった。父正勝(1597～1634)が没したのちに、幼年であった正則は春日局に養われている。

福は明智光秀の重臣であった斎藤利三の娘で、

本能寺の変後に父が謀叛人として討たれたあとは稲葉一鉄(1515～1588)に匿われ、一鉄の長男重通(?～1598)の養女となった。慶長9年(1604)に生まれた徳川家光の乳母になると、江



淀稲葉家略系図

戸城の奥において権勢を得ていき、徳川将軍家と朝廷や大名らの仲介をもつとめるようになる。家光の生母との説もある。

正成は美濃国本巢郡十七条(瑞穂市)に生まれた。父は十七条城主であった林政秀である。政秀は稲葉一鉄と争いが絶えなかったが和睦し、その証として、正成が稲葉重通(一鉄の庶子)の婿に入り、稲葉を名乗るようになったという。福は、正成にとって二番目の室にあたる。正勝らが生まれたのちに福とは離縁している。

正勝は春日局の縁で家光に近侍するようになり、元和9年(1623)に家光が将軍に任じられると、その奉行職(年寄、老中職に相当)に抜擢された。正勝は、石高の無い状態から譜代大名にまで成長しており、淀稲葉家の礎は正勝が築いたといえる。

4 立政寺第31世・印空上人

「亀甲山歴代年譜」(立政寺蔵、歴代住職の事跡を年譜としてまとめた史料、第39世貫空が延享4年(1747)に記した「濃州厚見郡西庄立政寺歴代大年譜」以降、昭和に至るまで書き継がれている)によれば、「双龍図」の寄進銘にある「印空」とは、立政寺第31世の印空上人(?～1692)である。印空は、延宝3年(1675)に入寺し、元禄5年(1692)まで17年間在住したとも、退院の1年後に京都で入寂したともいう。同年譜に「帰京」とあることから、立政寺の前には京都で活動していたのであろう。

5 稲葉正喬筆「寿老人図」

前号(前編)で紹介した狩野守政筆「双龍図」には二幅とも「稲葉美濃守御寄附 龍画 三幅之内」という外題が付されている。実は二幅を収めた木箱には、もう一幅収められている(次頁左段)。

本紙の法量は縦128.7 cm・横54.8 cmである。寄進銘は「寄進美濃国立政寺」、款記は「越



智末流正喬
畫]である。
落款は「正
喬」朱文方
印と「含章
之印」白文
方印である。
外題には「寿老人
画像 三幅
対」とあり、
立政寺にお
いて「双龍
図」と合わ
せて三幅対
として伝来
したものと
みられる。

作者の正
喬は、稲葉
正則の次男

である正倚（1647～1714）のことで、正喬は
初名、含章と号した。7千石を知行し、没後は
春日局の菩提寺である京都麟祥院に葬られた。
麟祥院には正喬の作例が遺されている。

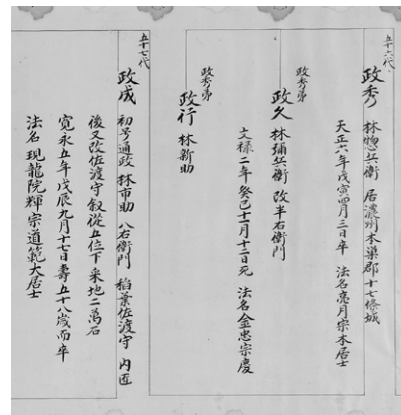
6 立政寺と淀稲葉家

宝暦元年（1751）の奥書をもつ「濃州立政寺
歴代記」（立政寺蔵）に、第31世の印空上人代
のとき、稲葉正則（致仕号 泰應）が「霊牌八本」
を建て、「三十余石」を寄進したことが記され
ている。寛延元年（1748）の年紀をもつ「当山
古来定式目録」（『岐阜市史 史料編 近世三』
「立政寺文書」）には「一 於当村稲葉家等買附
等 掟高三拾五石六斗二升（下略）」とある。

また、先の「亀甲山歴代年譜」には次の逸話
が残されている。印空上人が初めて参府した際
に泰應の屋敷を訪問したところ、狩野某が新た

に描いた三幅対の作品を拝見する機会を得た。
上人は特に感じ入って、泰應の求めに応じて賛
を記すと、賛文の見事さに泰應は感心したとい
う。淀稲葉家は泰應代に立政寺に帰依したと考
えられる。

その契機については、いまのところ明証を欠
いているが、「越智姓河野林氏譜略」（立政寺蔵、
下図、部分）は手掛りの一つとなるように思わ



れる。同譜は
「系図者依為
秘本戒名俗名
相記納之、且
為御回向也
貞享四年
（1687）丁卯
四月十五日」
の奥書をも

つ。正勝代までの系図と、正成や正勝、春日局
らの戒名が記されている。戒名には「正則祖父」
等の説明が付されていることから、泰應が奉納
したのは間違いのないであろう。

そして、正成の養家の稲葉重通（因みに稲葉
一鉄嫡子の貞通流はのちに臼杵稲葉家となる
が、同家も越智姓河野氏である）ではなく生家
の林政秀に系譜を求めている点に注目される。
林氏の居城十七条城と立政寺とは直線距離で7
km程度であった。

【参考文献】

- ・『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会）
- ・『古畫備考』（思文閣出版、1970年復刻、初版は1904年）
- ・『鍛冶橋狩野家印譜』（巧芸社、1921年）
※国立国会図書館のデジタル公開を利用した。
- ・『春日局ゆかりの寺 麟祥院展』（花園大学歴史博物館、2008年）
- ・下重清『稲葉正則とその時代—江戸社会の形成—』（夢工房、2002年）
- ・福田千鶴『春日局—今日は火宅を通れぬるかな—』（ミネルヴァ書房、2017年）

汽車土瓶

昭和20～30年代

長さ11cm 幅9cm 高さ6cm

汽車土瓶は駅弁とともに販売されていたお茶を入れる焼き物です。明治20年ごろに汽車土瓶が登場し、ポリエチレン製の容器が登場する昭和30年ごろまで旅の供として全国で販売されました。

汽車土瓶は瀬戸・信楽を始め全国各地の窯場で生産され、美濃においても明治30年ごろから作られるようになりました。本資料は其中でも後期に生産されたものになります。翼を広げた鶴を描き、土瓶下部には籠目を押出して成形し、鶴飼をモチーフとしています。また「岐阜」「かすみかん」の文字を入れていることから岐阜駅で駅弁を販売していた嘉寿美術館が扱っていた商品と分かります。土瓶には小さな湯呑みが付属しており、蓋としても利用していたほか、輸送の際には土瓶の中に湯呑みが収納できるようにもなっていました。鉄道の歴史や当時の旅の様子を探るうえで興味深い資料であると言えるでしょう。



利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
(歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日)
(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※特別展・企画展開催中に変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
(団体は20人以上)

高校生以上…310円(団体250円)

小中学生…150円(団体90円)

両館共通で観覧される場合

高校生以上…520円(団体410円)

小中学生…260円(団体150円)

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

①岐阜市在住の70歳以上の方(特別展を除く)

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人

③家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族(高校生以上)の方(特別展を除く)

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

交通案内

《歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館》

JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行に乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でお越しの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp>



《原三溪記念室》

岐阜バス西部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行に乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分

岐阜バス西部三田洞線 もえぎの里及び高桑行に乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.112 2022.9

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080